



2024 年

6 月 第 4・5 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 6 月 23 日 ルカ福音書 10 : 25 - 37 .

『 隣人となる者 』

・ 6 月 30 日 : 使徒言行録 3 : 17 - 23 .

『 万物更新の時 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

《 隣人となる者 》

わたしがイスラエルを癒そうとすると…サマリアの悪事が現れる。彼らは人を欺き、家には盗人が押し入り、外では盗賊が襲う。彼らは自分たちの悪事を何ら意に介さないが、私はこれを心に留めておく。

(ホセア書7：1 - 2 a)

イスラエルとは、北イスラエル王国、サマリアはその首都でした。南王国より先に滅び(B.C.721)、再興されることのなかった北王国の不信仰の象徴が“サマリア”です。そのイメージは古代、中東世界では長く引きずられたようです。北王国の滅亡後は、その地域全体を指して“サマリア”と呼ばれるようになり、そこで生まれ育った人々は漠然とサマリア人と認識されるようになります。ただ不幸にも、彼らに対してユダヤ人が抱く印象には、歴史的に定着した悪のイメージがつきまとい、両者の交流は、しばしば閉ざされたままでした。以下は、ヨハネ福音書に出て来る“サマリアの女”の発言です。

「ユダヤ人のあなたがサマリアの女の私に、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際していなかったからである。(同書4：9)

ここに出て来る「あなた」とはイエスのことです。イエスがある日、サマリア人が所有する井戸の水を飲みたいと意思表示をした時の、所有者の反応です。このように(ユダヤ人の)イエスでさえも、拒絶されるほどの間柄でした。さて今日のお話は、“良き”サマリア人の譬えです。

ある人がエルサレムからエリコへ下っていく途中、追剥に襲われた。追剥たちはその人の服を剥ぎ取り、殴りつけ、瀕死の状態にして逃げ去った。(ルカ福音書10：30)

これは悲劇的な譬えというよりも、むしろ実際にそこで起きていた事件

の一つのようです。この譬えを聞かされたユダヤ人が、最初に疑う特定の犯人像は“サマリア人の誰か”に違いありません。この譬えの聞き手はユダヤの“律法の専門家”です。彼は事前にイエスに「永遠の命を受け継ぐ方法」と、律法にある隣人愛の“対象者”を問い質していたのです。イエスを試みるために。イエスの譬えは、これらの質問に対する答えでした。

さて、譬えの凶悪事件が発生して間もなく被害者のそばを、前後して、立ち止まらずに通過した者が二人いました。一人はユダヤの祭司、もう一人はレビ人です。どちらも質問者とは交流のあるユダヤ人の同志です。ただ彼らが別々に、それぞれ事件現場を通過した際には無情にも、負傷者を一瞥しただけで、手をさしのべることなく反対側を通過してしまいます。

その後、現場を通りかかった三人目の人物（サマリア人）がやっと、瀕死の被害者に目をとめ、所持していたオリーブ油と葡萄酒を負傷者の傷に注ぎ、現場から運び出し、宿泊所で一晩介抱し、一旦はそこにあずけて再訪を約束し、追加料金も含めて、費用の全額負担を申し出たのでした。

さて、イエスはこの話をもとに質問者（律法の専門家）に対し問いかけます。事件現場を通りかかった三人のうち被害者の“隣人”になったのは誰か？　すると質問者は答えました、「その人（怪我人）を助けた人物です」。イエスがその救命者のことを事前に“サマリア人”であったことを、開示していたにもかかわらず、質問者は最後の最後までその“名称”を口にすることは、ありませんでした。

最後にイエスは質問者に向かって、こう締めくくります、「行ってあなたも（この良きサマリア人と）同じようにしなさい」。ユダヤ人の二人の“同志”（通行人）ではなく、このサマリア人のしたことこそが“永遠の命を受け継ぐ”に相応しい行為なのだと。

《 万物更新の時 》

第1コリント書の2章6節以下には「世界の始まる前から定め」られていた“隠された秘義”のことを、この世の支配者たちは誰一人悟ることがなかったが故に、キリストは十字架につけられたとあります。

今日の使徒言行録にも、同様のことが記されています。

あなたがたがあんなこと（キリストを十字架刑に処したこと）をしてしまったのは、指導者たちと同様に無知のためであったと、私（ペトロ）には分かっています。（使徒言行録3：17）

ペトロもパウロも、上に立つ者らの“無知”や、これに同調してしまった民衆の無知が相俟って、キリストの十字架刑が成立したことを解き明かします。さらには、その後も開示されないままの時、すなわち“万物が新しくなる時”に至って初めて、（復活と昇天の後に）天に留め置かれたままのイエス・キリストの再臨が、慰めの時と共にもたらされるということです。不明な点も多々あります。謎は謎として温存されます。ただ、様々な憶測は、徐々に払拭され、最後には一つの真理へと導かれるでしょう。

彼ら（ペトロとパウロ）がそれぞれ悟ったことには少なからず共通点がありました。これは、パウロがエルサレムを度々、訪問した際に、現地の使徒たちと相互に深く語り合ったことの証しです。

さて、“主を待ち望む”こと、これは古代イスラエルでは共通の認識としてありました。けれども、いざ、その日を迎えた時、殆ど全ての“備えなき者ら”の手によってイエスは十字架にかけられました。事の重大さを悟ったのは、キリストの使徒たちでさえ事後、時を経てからのことです。

さて、ペトロの演説はエルサレムの神殿で公開されました。世の支配者らの批判も含めて堂々と。もしかしたら、師イエスよりも長々と。

よく、逮捕されずに済んだものと思いきや、この直後、彼らは当局に連行され、議会を取り調べを受けることになります（使徒言行録4章）。

ユダヤの議員たちもさぞかし不思議に感じたでしょう、彼らの監視の的だった今はなきナザレのイエスではなく、彼に追随していただけの、無知蒙昧の弟子たちの中から“語り部”が誕生したことが。A1のまだない時代のこと、弟子たちはいったい何処から大そうな“知恵”を授かったのか、イエスが天に昇る直前に語った言葉がこの謎を解き明かします。

あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、私の証人となる。（使徒言行録1：8）